

# 反帝旗

号外版

1982.6.13

党旗社

中村光進

東京都墨田区亀有3-27-3

マル青同中央本部

〒130 電話 (03) 624-2481

振替 東京190784

関西地区事務所

電話 (06) 349-2354

帝国主義打倒！

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！

マルクス主義青年同盟

中央突撃隊

# 肥大化せる軍需寄食帝国主義と闘う全人民的政治生活の歴史的転換を切り開け！

一、人民運動の政治的転換、それはどのようにして闘いとられたか！

反戦・反核・反安保闘争に結集したすべての労苦人民・被指導大衆・市民のみなさん、

三・二・二広島、五・一・三東京行動は、六〇年安保を越えて、「空前の規模」といわれ、結集した多様さもまた空前のものであった。わが党的五・三ズローガンは、次のように掲げられた——「反戦・反核・反安保闘争―戦時階級闘争の高揚を阻止せんとする軍需賛成攻撃にうちかち、戦時革命的大衆行動の水路を切り開く組織をうむたてる政治的転換点として五・三闘争を開いたれ！」——五・三闘争は、こうした転換点として闘いとられたである。

うか。またそのようにしてたたかいつられたとしたら、それはどのようにして闘いとられ、どのように発展させられるべきものであろうか。

すでに昨秋期、われわれは、ボーランド危機を介して歐州反核運動に運動のもつ意義を再度確認しその闘争は自國政府自國の政治支配体制に対する闘争となればなるほど、あらゆる人民運動の連帯と統一をつくりあげるための運動抑止・寸断を乗り越える新たな人民運動の転換のための政治的潮流となるであろうと述べておいた。そこでわれわれは、戦後階級闘争における反戦運動のものも、その意義を再度確認しその闘争は自國政府自國の政治支配体制に対する闘争となればなること、そこにおいてはただそのための行動のための第一歩だけが問題となっていること、その行動のための一歩は、七〇年代の転向・挫折思潮、七〇年代的私的意識の枠をうち破ってはじめて可能となるであろうこと、そして国家資本主義的階級的軍需賛成的・帝国主義的言行や、「行革」的再編が、その行動の「手助け」の役割を果たしてしまったものであることを提起しておいた。事態はそのように進んでいる。今日の反戦・反核運動は、帝国主義と社会帝国主義との古いでききの「世界管理」政策が破綻するところから(過渡期の第一段階の受け目から)必然的に成長してきたものであり、第三次世界再分割戦争の危機そのものとともに成長してきたものである。戦時の帝国主義的祖国防衛主義との「せめぎあい」の中から成熟してきたのである。そしてわれわれが、その中へもちこんでいたものこそが、党一國家問題を住民にもちこもうとした転向・挫折と党一國家問題をつけとろうとした住民の相互関係そのものを収容していく闘争にはかならなかなかつたのである。

その上に立つて、五・三闘争は明確な全つの政治的転換点となつた。

第一に、反戦・反核運動が一つの政治勢力になった。七〇年代後期、有事立法以降、寄生翼賛政党は、なれをうつて帝国翼賛体制にはせ参じ、祖国防衛主義の提唱者となつたが、そのさいに、その行動の正当化するために使われたものはいつでも「現実政治」・「現実主義」の美名であった。反核運動に対しても、「気持ちわかるが、現実の世界政治はどういうものではない」とわけ知り顔をするのが体制内的知識人や官僚連のきまり文句である。彼らの、いう現実とは、プロレタリアート人民の革命の大衆行動を抑圧し、それを消し去つた「上での現実である。そこで巾をきかしているものは、できないの」である。

まさに五・三闘争を復讐したものこそ、「核兵器、帝国主義侵略者はハリコの虎であり、人がこわがればおそろしく見えるが、こわがらなければ柄ちた巨木のようにひき倒される」という反帝闘争の革命的原則なのである。

第二に、それゆえに、この反戦・反核運動は、旧い七〇年代の左派関係を自ら自身にとっての怪物としてながら発展している。この点で、「左」の空論主義、日和見主義諸派は、特筆すべき功績を残した。戦後反帝闘争の血の教訓、その革命的精神を、人民大衆の中にもちこむことを忘れ、それを語らず、帝国主義を打倒する政治権力闘争を回避してあれこれの政治的空文句と当面の利害争いに終止してきた諸政党は、この理由によつて新たな反戦・反核運動に対して教えるべきものをもたない。でききの軍事的・寄生的・官僚的国家機構を打ち碎くという任務だけが九五パーセントの勤労大衆の統一と团结と同盟と統合を實現し、強固にし、発展させることができ、この同盟なしには民主主義は不安定で、不可避的にブルジョア的に欺瞞的で、軍需寄食運動によって不斷に破壊されるものとなるべきである。社会主義的改進に向かって踏み出すことは不可能であること、七〇年代に、いたるところで、あらゆる政治勢力が「統一」を呼び、「大衆運動の团结」を唱えてきたが、まさに、この問題だけは避けて通つてきたのである。六〇年代後半の革命的大衆行動の敗北は、政治権力闘争の回避といふ習慣を、大衆の自然発生性に寄生することによって眞の政治問題に代位させ、すりかえようとする習慣を彼らの中につくりあげたのである。反対に、六〇年代後半の革命的大衆行動とその敗北の諸結果は、われわれにどうてば、ブルジョア的・軍事的・官僚的・国家機構を最後までうちはぼす新たな人民革命の形成へと向かうためのいわば「疏闊舌」としてのみあつたのである。反核・平和運動の個々の歩みには余余曲折もあり、動搖もあり、ブルジョア的姿勢もある。しかし古い政治経済制度のもとではもはや容することができなくなつた、新たな時代、新たな型の全人民的政治生活の転換が開始せざるをえなくなつたということ、そしてこの新たな人民運動の成長は、それ自身のうちに古いでききの党派関係を廢絶の対象とせざるをえない諸関係をもち、「この運動の成長は、この思潮、七〇年代的ウツケ・タクツケ病が、新たな革命的政治生活における因縁として存在していることが、全人民の前に暴露されつつあることである。いいかえれば、今日の反戦・反核運動は、このような肉腫の階級的本性をあからさまに露呈させざるをえない闘争条件、闘争舞台を日々生み出し、提供していくであろう。これは過渡期の第二段階の共産主義と人民運動との結合という任務にとつて次ぐことのできない条件である。」

革命的大衆行動の時代、人民の共同行動の時代は必然的に、激しい死にもぐるいの政治闘争、党派闘争の

# マル青同 中央突撃隊

連絡先：東京都墨田区亀有3-27-3 マル青同中央本部 電話 (03) 624-2481

時代である。打ち破られはしたがまだ絶滅されていない資本主義と、生まれはしたがまだ弱い共産主義との熾烈な闘争の時代へ過渡期世界の政治地盤は、この闘争を未曾有に深く、鋭い形のものにせざるをえない。この闘争の角をなんとか鈍いものにしたい、あつてはならないものにしたいと願望すること、これが小ブルジョアジーの特性である。

八〇年代前期の階級攻防戦の性格は、できあいの過渡期階級闘争の諸関係にとどまるうとする人々と正規の過渡期階級闘争の諸関係をうちたてようと、人々との激しい戦いとなることは理論上疑いをいれないばかりか、すでに今春期政府で実証されている。

だからこそ、生まれつある正規の過渡期階級闘争の諸關係をうちたてようとする人々の活動をうちかため、拡大し、激化してゆく諸問題を動搖なく手にしてゆく政治能力、すなわち、第一段階の党—國家—社会建設の諸問題、党および國家と革命の諸問題を正規に主体化する実業的突破口—政治組織問題のとり扱いの方の政治的転換を可能たらしめる秋期闘争に備えるべく、反ファシズム戦線の弱さを、そのできあい性を転覆する闘争方法を手にするため、今春期闘争の総括を語り、組織せよと夏期闘争が規定されるのである。

戦時の人民運動の高揚をフルジニア自由派の後尾につけんとする翼賛思潮をいかに暴露し、うばいつくすのか。

の諸関係へと人間関係を再構成してゆくためには、階級闘争に対する嫌悪、階級闘争なしに現状の寄生性、腐朽性のたちあらわれをなくそうとする夢想、現状変革をめぐる革命と反革命、政治権力をめぐる政治闘争をなめらかにし、和解させ、鋭い角をぶくしようという志向、あらゆる自然発生的な無党派一無政府的階級闘争が鮮明な政治闘争の側へと移行・転化・飛躍してゆくあらがままの成長およびその成長を助け、援助する組織者の闇いとの結合を嫌悪し、政治闘争ぬき、党および国家と革命の諸関係を全民族化するために闘い、歴史生産の労苦なしでも階級闘争の生産物を手にできるという前史的遭物としての夢想、劣働に依した分配の原則を階級闘争、政治闘争の領域、すなわち党建設および国家と革命の領域にまで厳格に実行するための闇いをなめらかにし、なくし、もつて転向・挫折または闘わざしての國家行政への参加の道を多様化せんとする志向の人間の相互関係およびその前史的関係の社会の上に寄食し、肉腫化している小ブルジョア自由派は、ブルジョアジーな政治闘争に参加することを徹底して意識的に拒否する能力に応じて、登用され国家試験にうかり、人民闘争を包囲・搾取させてゆく能力に応じて登用されゆくブルジョア国家機構、その軍事的官僚機構との相互関係をたどり、軍需賛政権を攻撃してゆく闘いの準備・拡大を組織せしめることを通じる以外にないものである。

小ブルジョアジーはいつでもブルジョア自由主義の調停主義、宥和主義に自分の望みを託す。小ブルジョア的左翼主義者たちも、その言葉の革命性とはうらはらに実際にいつでもブルジョア自由派にうやうやしいほどの礼節をつくし、彼らと「お近づき」になりたいと奔走し、彼らの下僕になる用意をいつでもしている。一方この時代のブルジョア自由派は、ブルジョアジー内部の闘争、軍需反動派との闘争の必要から、人民運動に接近する。彼らはここで自分たちもうけ入れられるような性格の運動であつてくれと要求し、日和見主義者や根っからの小市民主義者たちが、「この運動を反米闘争とならないよう」とか「草の根だから労働者を前面に出さないよう」という。赤旗をもちこまないようにして、とかいつた最新式の俗物根性や「マル書同のいうことはわかる。しかし党派としてではなく個人として、一サークルとしての参加であれば歓迎しよう。われわれはどこかの政党のもとに入つてやるつもりはない。なぜなら、政党なしにも、これだけ多くの人をあつめられるからだ」という「草の根」根性を發揮するのである。

これは何を意味するか。これは「あらゆる層の人々が結集できるようにすべての党派色、イデオロギー色を、せまくるしい規律をぬきさつた」ことをつぶし、ブルジョア宥和主義のイデオロギーで運動を「引きまわそう」とす

わからぬ。——中略——それは、ほんならぬ形式的な、「官僚主義的に」(気ままなインテリゲンツィアの見地からすれば)書かれた規約を基礎としなければならない。そしてこの規約の厳守だけが、サークル的な穎慧やサークル的な気まぐれや、思想闘争の自由な「過程」と呼ばれているサークル的な喧嘩の仕方からわれわれを守つてくれるのである。——中略——すでにわれわれは、説明する義務のない「信頼」というサークル的見地から、信頼を表明し検討するにあたって、説明義務のある、正式に決められた方法を守ることを要求する党的な見地に、たがまつたのである。」(レーニン「一步前进・二歩後退」)——ブルジョア自由派とは、このことを不斷に「おのれの現状」へと引き下げんとするのである。それは常に民運動の日和見主義との分離の脚のを歪曲し、卑俗化して生まれるものである。

六〇年代後半の闘争は、さまざまな欠陥をもつていていたとはいえ、ブルジョア民主主義闘争の枠組みを超えて、労・農・学・市民を自国帝國主義に対する闘争へと集合させた。帝國主義に対する闘争を拒否するもの、それを阻もうとするものと政治は容赦なく歴史のくず箱に投げこまれていった。この闘争が広範な統合力を失なつていったのは、革命的翼が「闘いすぎた」からではなく、この闘争の承認をブルコレタリアート独裁の承認に拡張し、社会主義革命の承認に拡張する闘争に即座に移行することのできなかつたからである。そしてそのために、帝國主義ブルジョアジーの反革命の前に広範な小ブルジョア層が動搖し、意氣消沈し、さまざまなりやけ方でブルコレタリアートの階級闘争から脱落し、ブルジョア民主主義派がブルコレタリアートの党派性の否定に走り、いやいやながらついてきた諸派分派や紳士たちが息をつきかえしてよう亢舌になり、「闘おうと思った時には闘う場がなかつた」という「七〇年代世代」の中に不可知や懷疑感が広がり、党と党規規律に対する否定、党建設のことなど何も知らないにもかわらず、解党主義になつたつもりの無党派主義の土壤が形成され、革命のための苦闘を笑いものにしなければ自分が笑いものになるがごとき「文明」がわがもの顔にふるまつていったのである。

しかし、それはつねに、社会主義的規律の人民運動への浸透を思ひ嫌い、党建設の闘いと大衆闘争の間に万里の長城をもうけ、大衆の党、國家建設への軽信・無自覺の上に寄生している以外の何ものでもない。

だからこそ、現実のブルコレタリアート党建設のための闘争と大衆闘争とを切りはなし、対立させようとすること、ブルコレタリアートの主体活動と大衆闘争の個々の局面を切りはなし、対立させようとすること、社会主義のための闘争が大衆に「もちこまれる」のを願を青ざめさせて阻もうとする(市民運動には社会主義なんか関係ない等々)といふやり方で。ところでロシア革命以降、あらゆる人民革命において、前衛党が党として参加せず、成功した革命があつたであろうか?こうした試みこそ、七〇年代初頭までの闘争によって形成された社会主義の下準備を實際上解消し、大衆の中にある社会主義のための闘争に接する意識性的萌芽をくいつぶし、ブルコレタリアートの党派性をうしろに引きもどし、反革命機構を打ち碎く、敵の要塞を奪取する正規の攻撃の陣形が人民運動全体の中で形成されることを擾乱させ、経済闘争や民主主義のための闘争を不斷にブルジョア民主主義の後尾へ従属せようとすることを、一言でいえば、戦後階級闘争の血の教訓をブルジョアジーと反共主義者に譲りわたすことによって、社会主義革命から人民運動をそらせ、漫画にかえてしまふるまいに七〇年代を遠じて赴いていたことを意味する。これこそが、七〇年代の「寄食構造」と呼ばれるものである。

それゆえに、革命をおそれた七〇年代の寄食者たちは、ブルジョア民主主義の後尾へと「逃げこむ」以外には、もはやいかなる意味でも進歩することはできない。

だが、これはいいことである。なぜなら、それは、これまでのあれこれの革命的空文句に隠れていた私的意識、私的論争、これまで大衆から「隠され」て「いた分岐を公然化させ、それをブルコレタリアートの党派性とブルジョアジー・小ブルジョアジーの党派性とをめぐる全人民的政治論争へと転化させることを早めるからである。

闘わざしての敗北ではなく、最後まで闘うことを望む自覺した活動家やブルコレタリア大衆の意識を啓発し、活潑化せざるをえないところの、眞の理論闘争・政治闘争・党派闘争を全住民の中に「送りこ」め、

## 転向・挫折の鉄鎖断て！

「家族的サークルのオブローモフ根性」というやつたりとした部屋着とスリッパに慣れた人たちには、形式的な規約は漠然として、窮屈で、厄介で、いやしく、官僚主義的で、農奴制的で、思想闘争の自由な「過程」を拘束するようと思われる。貴族的無政府主義には、狭いサークル的な結びつきを広い党的な結びつきに代えるためにこそ、この形式的な規約が必要であることがある。